

## 「Echo Trivia」

別府 慎太郎  
大阪みなと中央病院

今回の講演名にある「トリビア」とは、馴染みのない言葉かもしれませんが、我々の領域で言えば、カロードブラの所見として「MR trivial」などのように、「僧帽弁逆流が僅か」などの際に使う言葉です。トリビアとは、「とるに足らないこと、つまらないこと」です。

その昔、テレビで「トリビアの泉」という雑学バラエティ番組がありました。雑学というからには、「知っているも人生の役に立たない、でも知っていたら楽しい」位の情報で、その情報が面白ければ、それを評価して番組のパネラーが「ヘー」と言う、まあ、他愛もないものです。例えば、「ルパン三世と峰不二子には子供がいる」。「ヘー」てなものです。

「エコートリビア」と題するこの会では、皆さんよくご存じのエコーの内容で、余り堅苦しくない題材を選び、それをぼんやりと聞いていただいて、それでもって、「ヘー」と言ってもらえるような話ができればと思っています。「ヘー」と言うか言わぬかは、全く皆さん次第です。最初から最後まで、「ヘー」ならぬ「シラー」かもしれませんが、その際には、どうかご容赦。あくまでも、「トリビア」ですから。

「腹部超音波法の進歩」 ー質的診断への挑戦ー

小野 尚文

久留米大学消化器内科

腹部超音波（以後US）診断法は、1990年頃の初期は高い空間分解能と簡便性から肝腫瘍の描出（存在診断）にその威力を発揮し、US下腫瘍生検による質的診断により肝細胞癌の診断治療に有用性を示してきた。その後はUSだけでなく各種画像診断法も進歩し、質的診断への挑戦が始まった。

肝腫瘍に対する質的診断の進歩：①血流で評価するドブラ法、②腫瘍の血流および濃染像をパターンで評価する造影法である。特殊な性質を持つ超音波造影剤がUS装置のさらなる進歩をおこし、造影下RFAや三次元表示（造影も含む）も可能になった。また、CTやMRIとの③fusion imagingも可能で、USで描出困難（不明瞭）な肝細胞癌の診断治療に欠かせない方法となり、USの（空間認識）トレーニングとしても有用である。

びまん性肝疾患に対する質的診断の進歩：肝硬度を測定により病変進行の評価が有用となった。これは④フィブロスキャン法に始まり⑤Shear Wave法など各社で可能となり、減衰を利用した脂肪の評価も行えるようになってきた。これらの現状も示したい。

最後に、USの進歩は多くの臓器の（質的）診断に用いられるようになった。US初期は肝臓や胆のう以外の臓器では診断はむずかしく、消化管に関してはガスで評価できないとされていた。しかし⑥消化管疾患では有用性が示され、腎機能の低下や検査時の安静が保てないことが多い高齢者にはとりわけ有用である。USは骨折や膝関節症等の⑦整形領域にも有用であり、救急領域も苦戦しているが、今後は高齢者施設での使用が期待される。

今回は時間の関係もありUS検査法の現状・進歩（②⑤⑥中心）を述べさせていただきたい。